

「瑩山禪師の碑」黒田倫子夫人寄進

京都・清水寺の境内に

このたび京都・清水寺（北法相宗大本山、森清範貫主猊下）の境内に、曹洞宗太祖瑩山禪師にまつわる石碑が、善光寺寺族黒田倫子夫人の寄進で建つことになり、いま、その具体的な準備がすすめられている。

曹洞宗高祖と仰がれる道元禪師が出家したのは、母君のいまわのきわの遺言によるのであり、出家の決意を固めたのは、母君の仏事の際にのぼる香煙をみつめたのが、その動機であったという。しかも、道元禪師と観音さまとのむすび

つきも深く、道元禪師に一葉観音の伝説あり、宋より帰国後、京都に興聖寺というわが国最初の本格的な坐禅道場を建てたが、その寺名を観音導利院（ふつう興聖寺という）と命名しており、その代表的著作『正法眼蔵』九五巻には、「観音」の巻があり、いま、永平寺の法堂には観音さまが御本尊として奉安してある。

高祖道元禪師とならんで太祖瑩山禪師も、母君、祖母君の観音信仰、とくに京都、清水の観音さまにまつわる観音信仰が深い。

道元禪師は京都のご出身であり、瑩山禪師は越前のご出身である。ともに関西文化圏であり、京都や奈良、比叡山、高野山の仏教信仰の決定的な背景のもとにある。もとより道元禪師が、京都の清水の観音さまをご存知ないわけではなく、お参りされていないわけではない。それは、瑩山禪師においても同様である。

実に不思議なことだが、清水寺のご本堂におもむく轟門には江戸時代の高僧、曹洞宗中興の祖・月舟宗胡禪師（金沢市・大乘寺中興二二六世）の「普門閣」の扁額がかかっている。また、昭和五十八年、涅槃会の二月十五日、百九歳で遷化された清水寺貫主・大西良慶和上の乗炬は、清水寺のご要請によって、わが曹洞宗大本山永平寺七十六世秦慧玉禪師がおつとめになった。このような尊といご縁のある清水寺に、とくにお願いを申しあげて、とりわけむすびつきの深い瑩山禪師にかかわる建碑が実現することと

なった。稀代の勝躑というべきである。その文面は、左のとおりである。平成十三年中には、その優雅な碑がすがたをあらわすことだろう。場所は、仁王門を正面にして右側に十一層石塔があるが、その石塔の下で、あたりの景観もまことにすぐれている。

曹洞宗太祖瑩山禪師と清水の観音さまとの深いえにしを報恩顕彰する碑

曹洞宗太祖常済大師瑩山禪師（そうどうしゅうたいそじょうさいだいしけいざんぜんじ）正中二年・西暦一三二五年示寂）は、鎌倉時代の末、越前（福井県）に降誕された祖師である。大師の自らの記するところによれば、大師は、幼少のころ、御祖母の明智さまに育てられた。明智さまは、曹洞宗高祖承陽大師道元禪師にこうそじょうやうだいしどうげんざし聞法し参禅された。

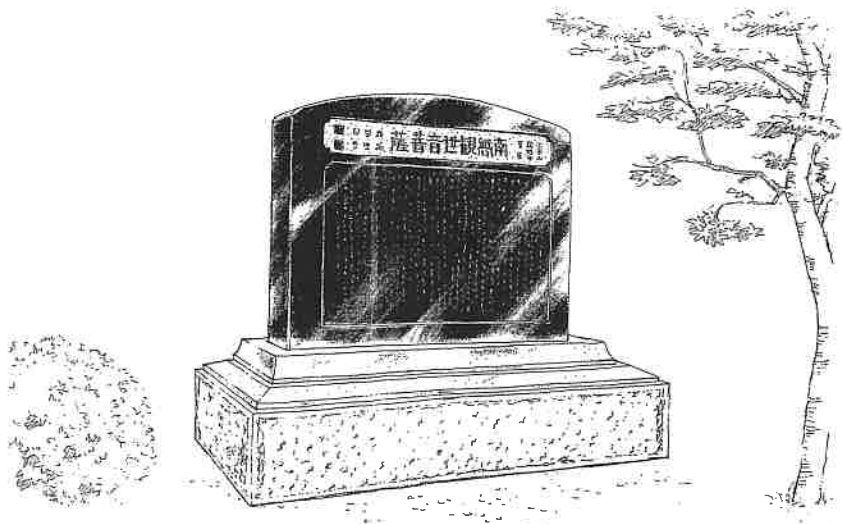
明智さまは、そのむかし、七、八年間にわ

敬興板

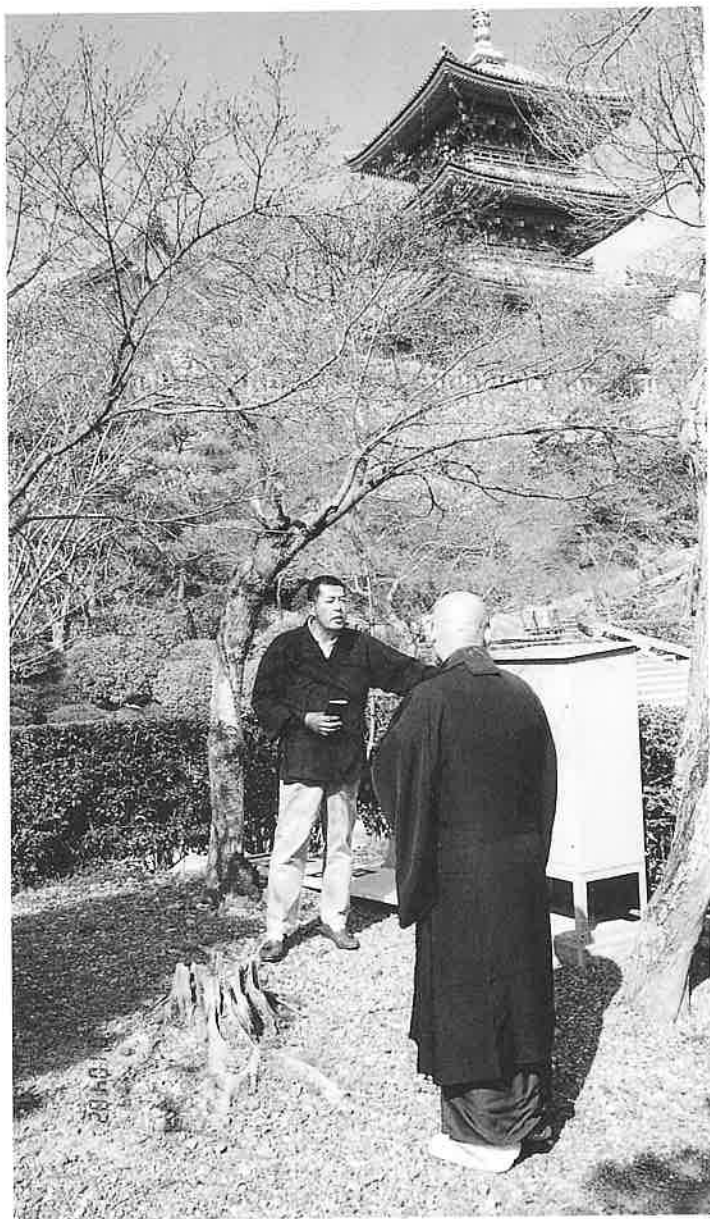
書宗橋

薩菩音世觀無南

貫總大
持本
首寺山



現場を説明する大西真興執事長



たつて、肉親の前から姿を消したことがあつたが、のちに大師の母君となる懐観えかんさまは、その消息をさがし求めて、清水きよみづの観音さまに日参し、明日は満願という六日めに、路上に小さな十一面観音さまの頭部を見つけ、これ拾いあげて、もし母の様子がわかれば、この観音像を補修したいと祈つたところ、願いは叶えられて、母君の明智さまと再会するこゝとが出来た。爾来、御祖母、御生母の深い観音仰に育まれて成長した大師は、能登（石川県）に洞谷山永光寺を開いて、かの十一面観音さまを奉安する円通院を建て、永光寺を女人に仏法のご利益がゆきわたる祈りの道場とし、また諸嶽山總持寺を開くにあたり、門

に入つて諸堂棟を廻顧すれば、清水寺のごとく、壯観であり、ここは仏法の縁が熟した霊場であると瑞夢を感じた。果して、仏祖正伝の法は、大師とその門流に至つて、飛躍的、爆発的に伸展したのである。

ここに、越前に生を受けた篤信の人、神奈川県横浜市成壽山善光寺の黒田倫子夫人は、発願して、資を投じ、大本山清水寺の御理解と大本山總持寺の御庇護のもと、常済大師、御生母懐観大師、御祖母明智優婆夷三代と清水の観音さまとの深い仏縁を顕彰し、永くその恩徳を讃える碑を建立するものである

（末孫 文学博士 東 隆眞撰）

平成一三年吉月吉祥日